

7 月 の 詩

二〇二五年七月朔日から末日

桜木心都悩

私は「またね」と言う

「また明日ね」と言う

あの子が明日も学校に来てくれますようにと

私は「お氣をつけて」と言う

あの人の無事を願って「お氣をつけて」と言う

自分では他人を助けられないから

他人に呪いを込めて明日を願う

変わらぬ明日が来ますようにと呪いを込める

良い師匠というものは教えよりも呪いを残すらしい
多くのことを教わりました

美しい世界について知りました

けれども私が思い出すのは

食べられるようになってしまった餡蜜の味

規則正しい時計の振り子

無駄遣いの面白さ

きつとずっと先も忘れない、忘れられない

今日の静かな青い月

あまりに月が眩しいので
人差し指で隠す
何も変わらない
指を離すとにつこり笑う
白くて丸い月の影

例えば絵を描くとして

筆とキャンバス、鉛筆を買って

所持金が無くなった

描き始めてイーゼルの必要性を知った

隣の人はイーゼルを使う

それ見て私はちくしうと思う

お金があればもっと自由に描けるのに

誰も生まれながらに持った物でしか戦えない

隣の人を妬むけど決して言葉にしない

彼も足りないまま戦う同士だから

でもやっぱりちくしうとは思う

学はくの上に成り立つ
決して豊かな道のではない
整えられたアスファルトをほじくり返しているような
楽はくの上に成り立つ
私の楽は誰かの苦によつて
誰かの楽は私の苦によつて
苦を弄するな、苦を厭うな

坂道の登りで立ち止まるな
また歩き出すのが辛くなる
上を見るのがくるしくなる
立ち止まるなら下り坂
そう信じて頂上を目指す
一歩一歩坂を登る

人がいる時よりも

人がいた後の方が寂しい

一人で歩く道よりも

人の足跡を追うのが心無い

振り返る貴方の顔に

目を合わせられない私

笑顔の奥にある震えた兎を

見つけて欲しいように

見つけられなくて

さらに土に潜る

そこに生えていた花を愛でるように

思い返すように土の下で眠る

白い紙の束がすき

今までの成果を積み重ねたように

これから始まる過程を重ねたように

どちらにもならない今を映す

積み重ねられた白い紙

重ねられているのに空っぽな

何を書くにも自由で

何を書くか決められていて

不自由な自由さがあるように

白い紙の束がすき

雑多に並んだバス乗り場で

私の一つ前の人がお先にどうぞと言った

言われたその人は手すり触れて足を入れた

私はどうして入れるのと怒りが湧いた

けれどもほんの数人でさえ

割り込ませる余裕のない私に一番

やるせなさを思った

これが親切